第 1 章　「新入生調査」の結果

第 1 章では、新入生 419 名に対する分析結果について報告する。学部別の内訳は、文教育学部 185 名、理学部 112 名、生活科学部 120 名である(学部無回答者 2 名)。

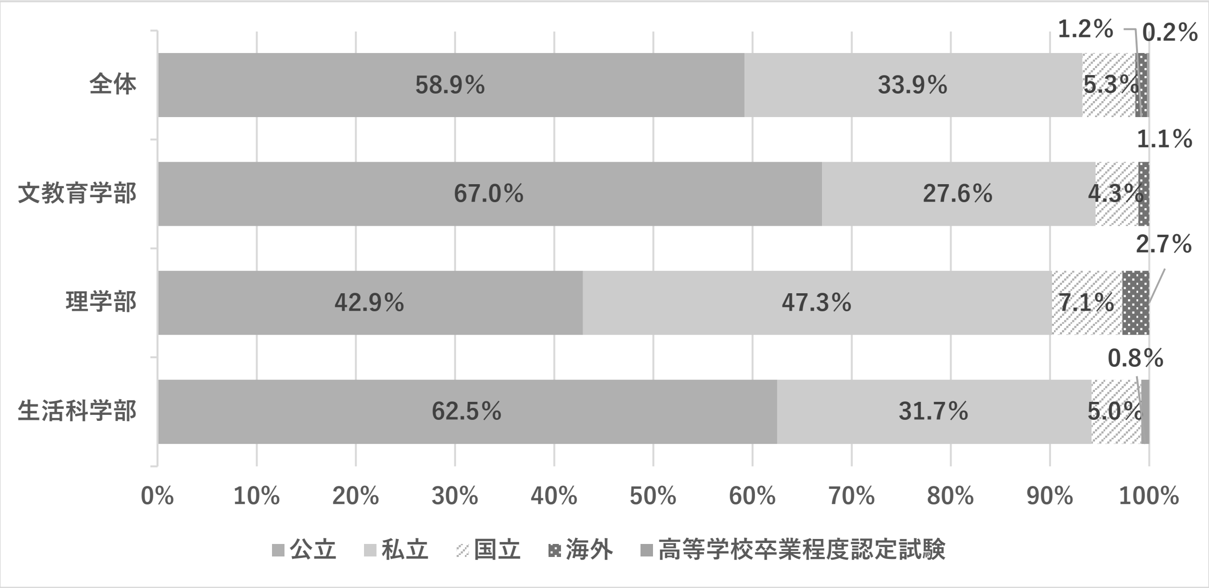
(1) 出身高校

はじめに出身高校について①設置者、②種類、③学科を示す。図表では新入生全体と学部別の内訳を示した。

① 設置者

図表 1-1 に出身高校の設置者についての結果を示す。出身高校の設置者について「国立」「公立」「私立」「海外」「高等学校卒業程度認定試験（高卒認定）」から選択してもらい回答を得た。

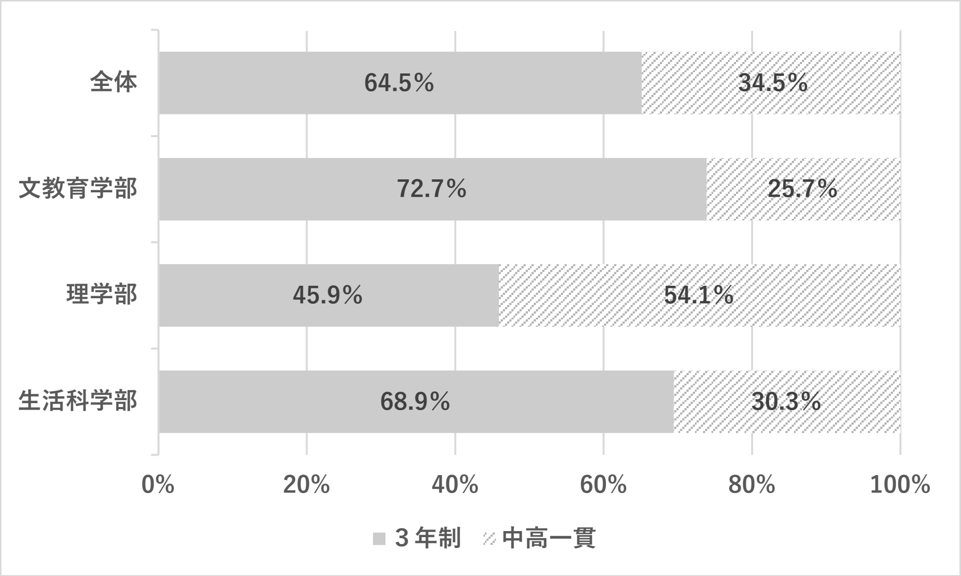
全体では、「公立」58.9%、「私立」33.9%、「国立」5.3%、「海外」1.2%であった。学部別では、文教育学部・生活科学部は「公立」の割合が高く(それぞれ 67.0%, 62.5%)、理学部は「私立」の割合が高い(47.3%)。このような学部における特徴は、過年度における結果でも同様であった。(お茶の水女子大学 2017; 2019)。



図表 1-1　出身高校の設置者

② 種類

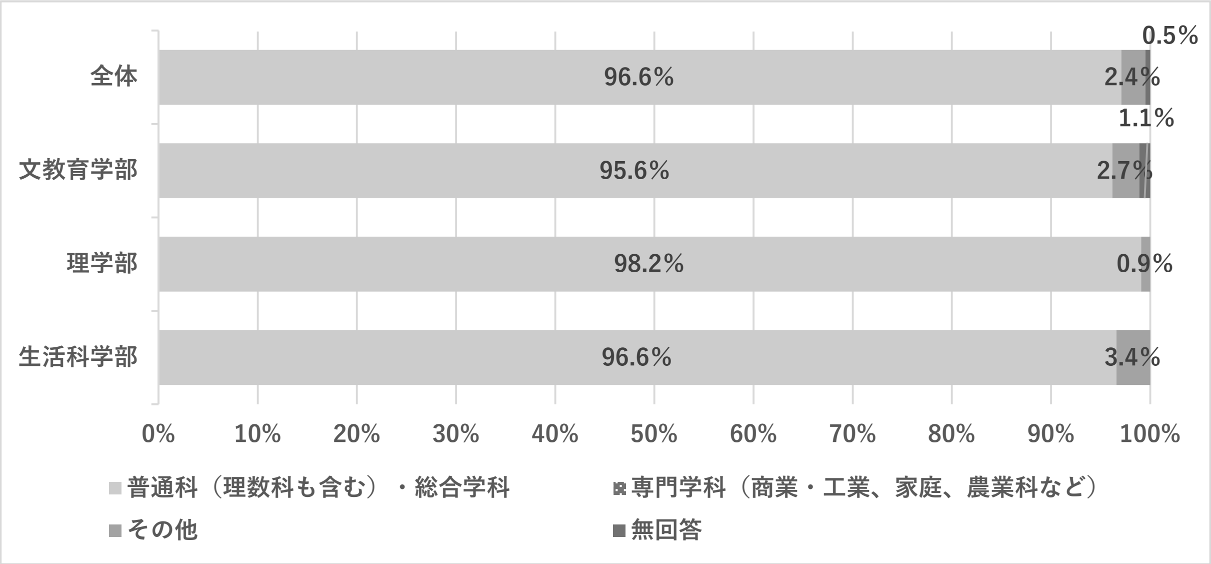
図表 1-2 に出身高校の種類について、「3 年制」「中高一貫」の別に示す。全体では、「3 年制」が 64.5%、「中高一貫」34.5%であり、理学部では、平成 30 年度および平成 29 年度と比較し、「中高一貫」が増加する傾向がみられた(お茶の水女子大学 2017; 2019)。



図表 1-2　出身高校の種類

③ 学科

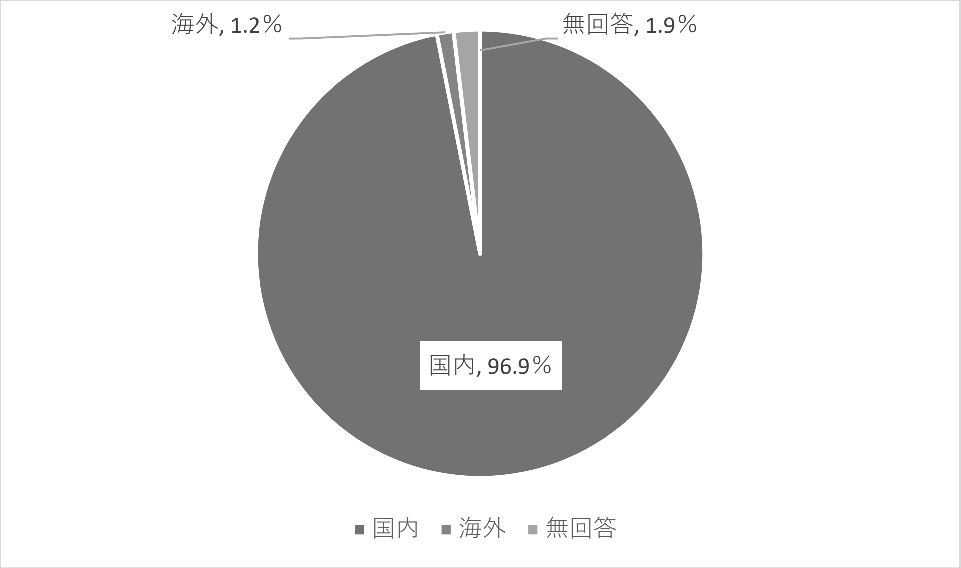
図表 1-3 に出身高校の学科を「普通科（理数科も含む）・総合学科」「専門学科（商業・工業、家庭、農業科など）」「その他」別に示す。全体の 96.6%が「普通科・総合学科」であり、学部間の差異はない。この傾向は、過年度においても同様であった。



図表 1-3　出身高校の学科

④ 出身高校の所在地

図表 1-4 に出身高校の所在地を「国内」「海外」別に示す。全体の 96.9%が「国内」であり、1.2%が海外の高校を卒業している。これは、全学部で、また過年度とも同様の傾向であった。



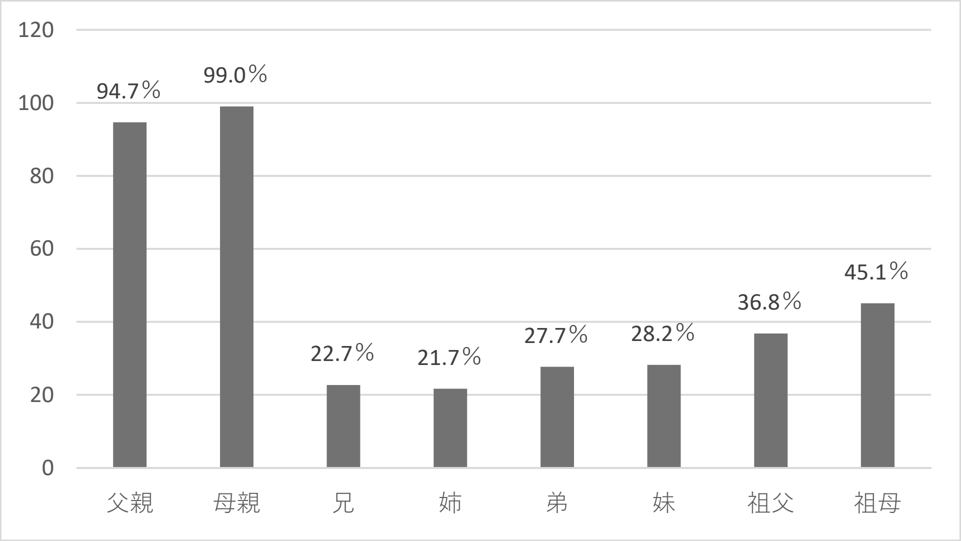
図表 1-4　出身高校の所在地

（2）家族構成

新入生の家族構成について、①家族構成、②きょうだい数について示す。

①　家族の構成

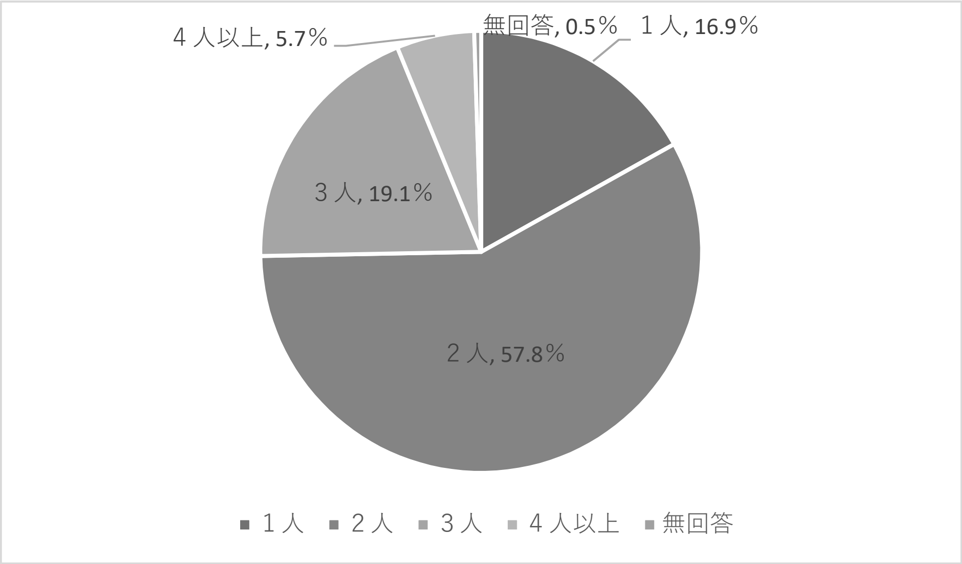
図表 2-1 に新入生の家族構成に関する結果を示す。同居を問わず家族構成について、複数選択可として回答を得た。家族の構成について、平成 30 年度や平成 29 年度からの変化は見られない。



図表 2-1　家族構成

②　きょうだい数

図表 2-2 は自分を含めたきょうだい数を尋ねた結果である。2 人きょうだいの割合が最も高く (57.8%)、3 人きょうだいも 19.1%である。この傾向も例年と同様であった。



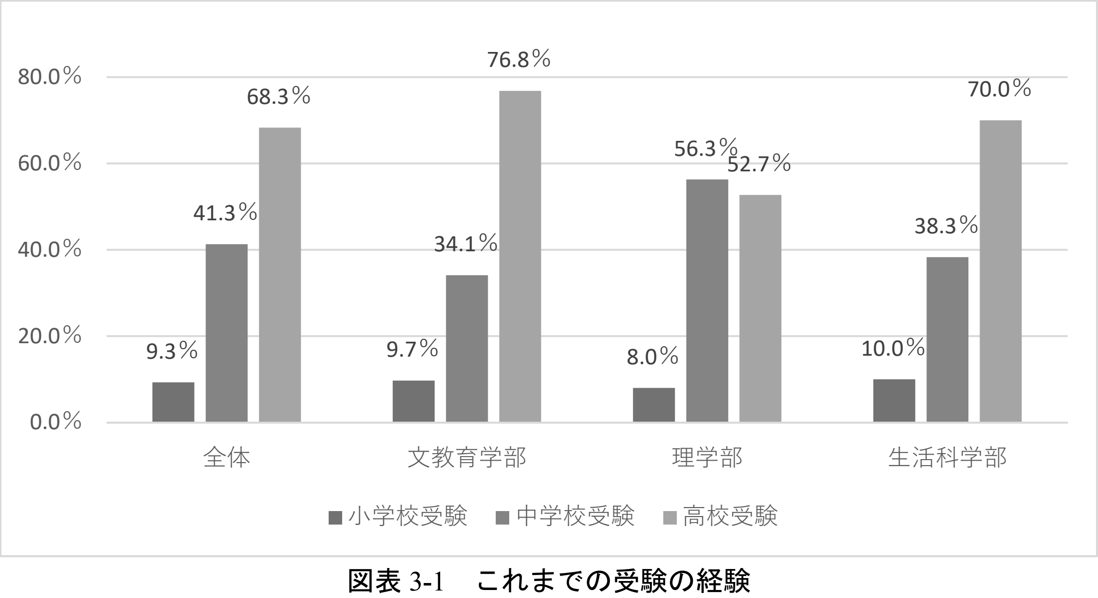
図表 2-2　自分を含めたきょうだい数

（3）これまでの進路選択や学生生活

本節では、新入生のこれまでの進路選択や学生生活について、①これまでの受験経験、②本学の受験を決めた時期、③本学の志望の度合い、④高校卒業から現在までの間に経験したことについて示す。

①　これまでの受験経験

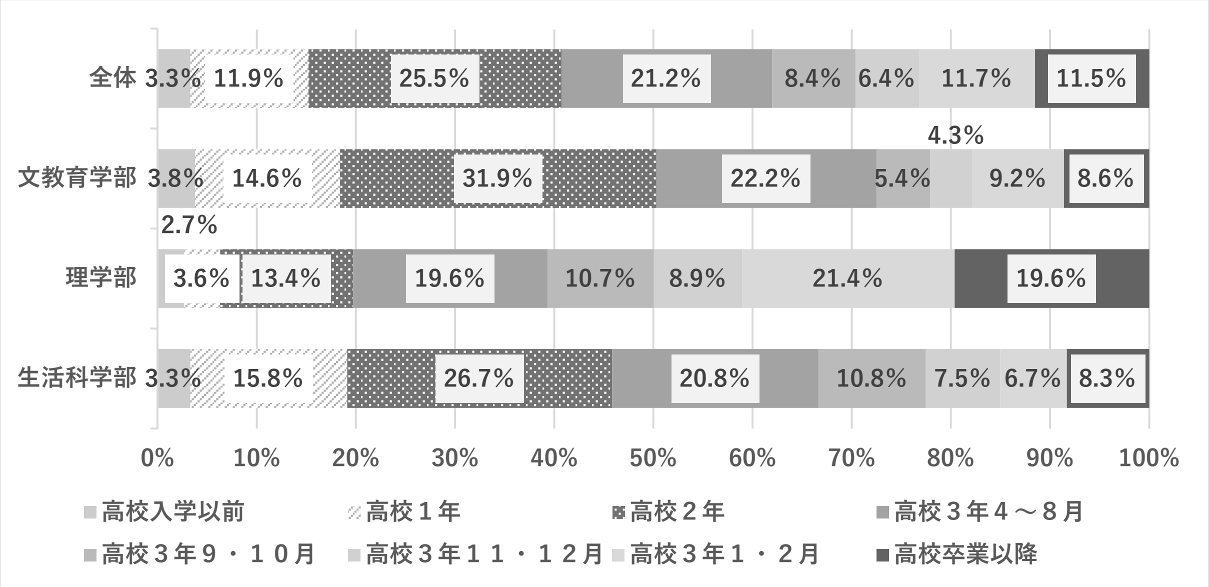
図表 3-1 は、これまでの受験経験について尋ねた結果である。全体の 9.3%が小学校受験を、41.3%が中学受験を、68.3%が高校受験を経験していた。この傾向は平成 30 年度および平成 29 年度においても同様であった(お茶の水女子大学 2017; 2019)。「第 1 回 大学生の学習・生活実態調査」における全国の大学生の中学受験経験率 18.8%、高校受験経験率 86.3%（ベネッセ教育研究開発センター 2009, p.41）との比較では、本学の新入生の中学受験経験率は高い方に、高校受験経験率は低い方に偏る傾向が見られる。



図表 3-1　これまでの受験の経験

②　本学の受験を決めた時期

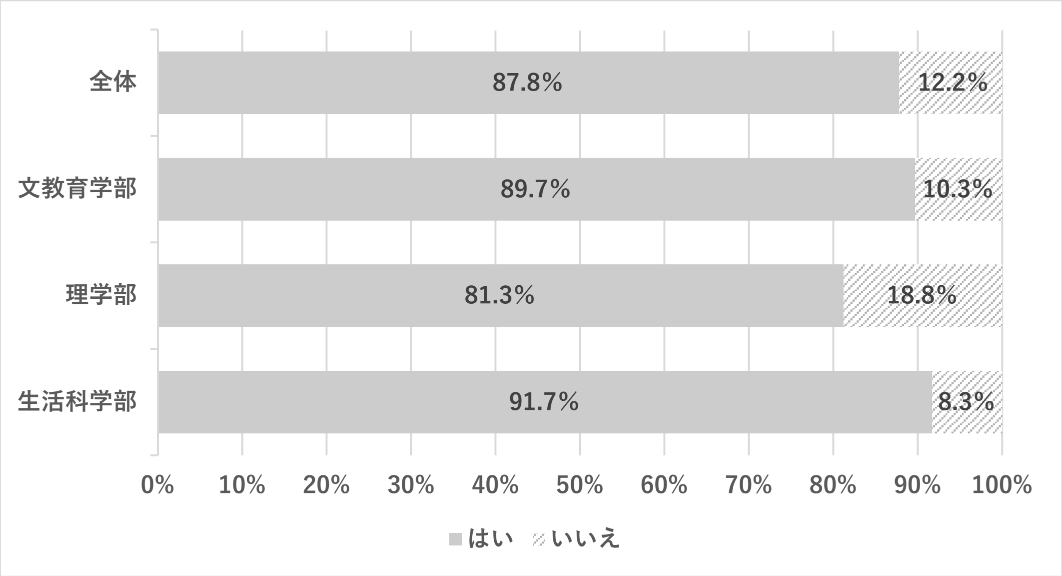
本学の受験を決めた時期について、その時期を尋ねた結果が図表 3-2 である。全体では「高校 2 年」25.5%および「高校 3 年 4～8 月」21.2%が高く、この傾向は過去 2 年とも同様である。理学部は、平成 30 年度に続いて高校 1 年の割合が 3.6%と低く、高校 3 年の 1･2 月および高校卒業以降の割合が高い傾向を示している(お茶の水女子大学 2019)。



図表 3-2　本学の受験を決めた時期

③　本学の志望の度合い

図表 3-3 に、受験時に本学が第一志望であったか否かについて尋ねた結果を示す。全体でみると 87.8%の新入生が本学を第一志望としており依然高く、平成 30 年度、平成 29 年度に比べてもやや高い傾向が見られる(お茶の水女子大学 2017; 2019)。学部別では、文教育学部、生活科学部は 9 割程度の新入生が本学を第一志望と回答しており、例年と同様である。理学部の第一志望の割合は平成 30 年度 70.2%、平成 29 年度 77.4%であったが、今年度はやや上昇する傾向が見られた。

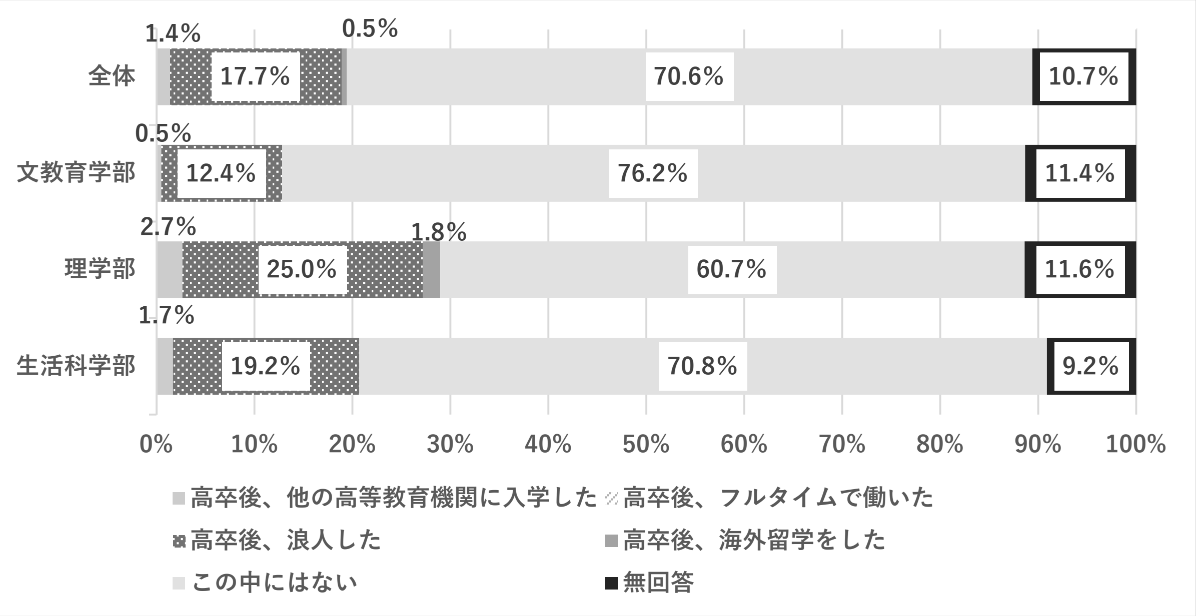


図表 3-3　本学の第一志望の度合

④　高校卒業から現在までの間に経験したこと

高校卒業から現在までに経験したことについて、「大学生の学習・生活実態調査」を参考に、複数回答可として尋ねた結果が図表 3-4 である。

過年度と同様「この中にはない」が全体の 70.6%と最も高いが、「浪人」は全体 17.7%で、平成 30 年度・平成 29 年度にくらべて約 2～3 ポイント高い。各学部における浪人の割合は、文教育学部が相対的に低く、理学部および生活科学部が高いという傾向は平成 30 年度・平成 29 年度も同様である。今年度の新入生においても昨年度までと同様に、高校卒業から調査時点までの間に海外留学をしたものの割合は低かった。



図表 3-4　高校卒業から現在までの間に経験したこと

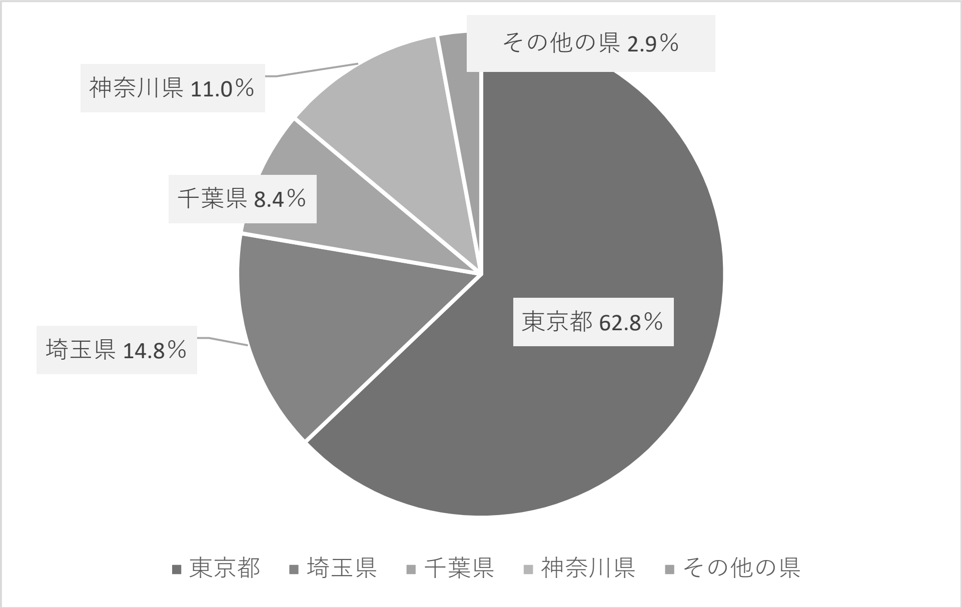
（4）大学入学後の生活の予定

本節では、新入生の大学入学後の生活の予定についての調査結果を示す。

調査項目は、①大学入学後に居住予定の都道府県、②大学入学後の住居の予定、③1 か月の家賃の予算、④1 か月あたりの仕送り予定金額、⑤大学に入学後、特にこの 1 年で頑張ろうと思う活動、⑥アルバイト活動の予定、⑦授業料の負担予定、⑧大学生活での不安・心配事、⑨本学の学生支援活動への期待についてである。

①　大学入学後に居住予定の都道府県

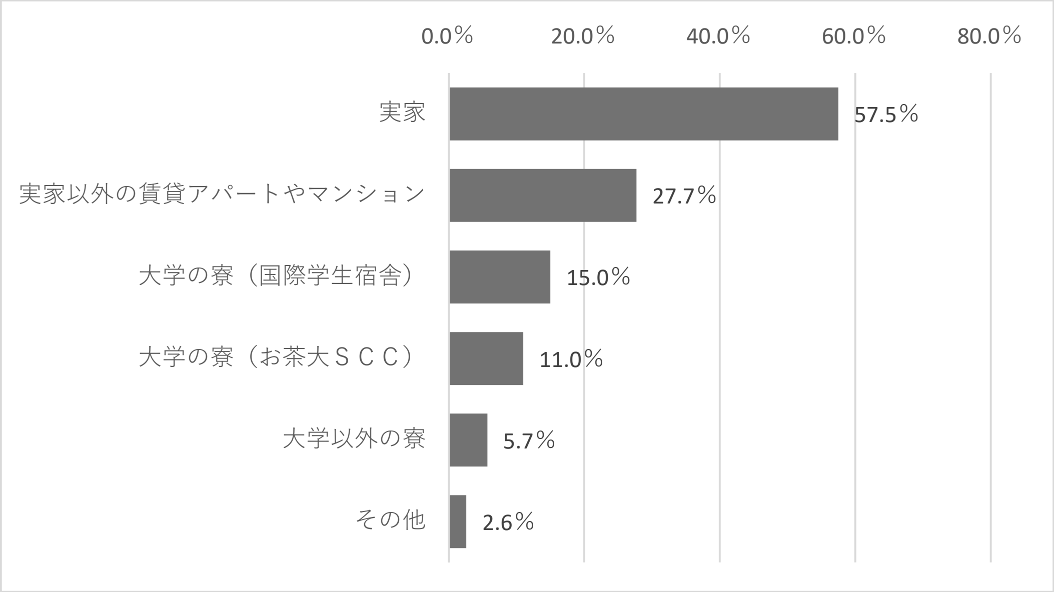
図表 4-1 に大学入学後に居住予定の都道府県について示す。全体では、東京都が 62.8%と最も高く、埼玉県、神奈川県、千葉県と続く。この傾向は例年と同様ある。



図表 4-1　大学入学後に居住予定の都道府県

② 大学入学後の住居の予定

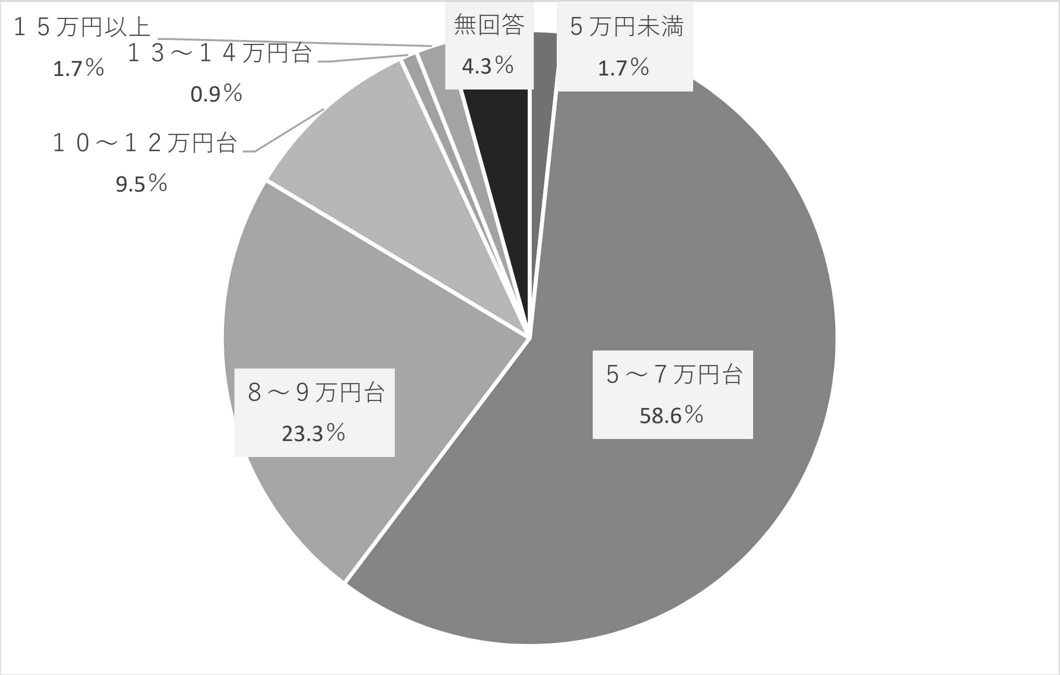
図表 4-2 は、大学入学後に予定している住居について、複数回答可として尋ねた結果である。全体では「実家」が 57.5%を占め、次いで「賃貸アパートやマンション」27.7%、「国際学生宿舎」15.0%、「お茶大 SCC」11.0%といった学生寮が続き、過年度と同様である。理学部は実家の比率が 73.5%と文教育学部や生活科学部に比べて特に高い。



図表 4-2　大学入学後に予定している住居

③　1 か月の家賃（管理費込み）の予算

図表 4-3 は、1 か月の家賃（管理費込み）の予算（千円未満は四捨五入）について、「賃貸アパートやマンション」に居住予定の者に尋ねた結果である[1]。「5〜7 万円」が 58.6%と最も多く、次いで「8〜9 万円」23.3%である。両者を合わせると 8 割超の学生が 1 か月の家賃として 5〜9 万円を予定していることがわかる。平成 30 年度と比較すると「5 万円未満」が 1.7 ポイント上昇、「5〜7 万円」の割合が 5.5 ポイント上昇しており、やや家賃予算が低下する傾向が見られた。



図表 4-3　1 か月の家賃（管理費込み）の予算

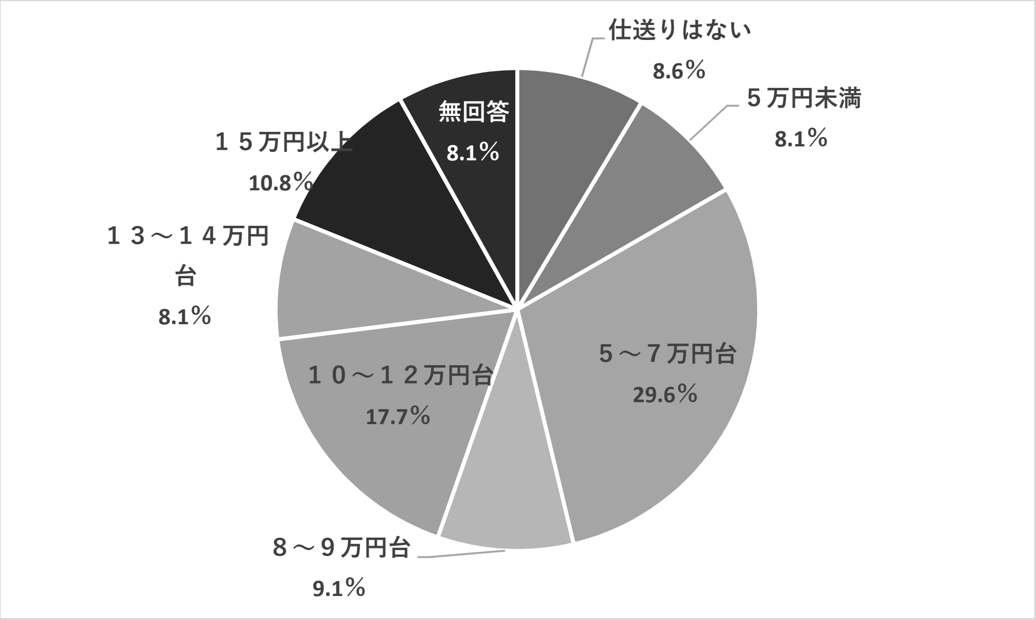
④　1 か月あたりの仕送り予定金額

図表 4-4 は、1 か月あたりの仕送り予定額（万円未満は四捨五入）について、「実家」以外に居住予定の者に尋ねた結果である[2]。「5〜7 万円台」が 29.6%と最も多く、次に「10〜12 万円」17.7%となっており、例年と同様である。しかし、各カテゴリーの変化を詳細に見ると、「仕送りがない」新入生は平成 31 年度 8.6%と、平成 30 年度 3.6%に比べて 5 ポイント上昇した。その一方で、平成 30 年度に比べて「5〜7 万円」は 3 ポイント低下したが「8〜9 万円」は 3 ポイント上昇し、10 万円以上の仕送りがある割合は 36.6%と例年と同様の傾向であった(お茶の水女子大学 2019; 2017)。

なお「第 54 回 学生生活実態調査の概要報告」（全国大学生活協同組合連合会 2019）によれば、下宿生のうち、仕送り金額が 5〜10 万円の学生の割合は 33.5%、仕送り 10 万円以上は 28.4%、仕送り 0 の割合は 7.0%、5 万円未満は 16.0%となっており、仕送り 0 が緩やかに上昇している。この調査との比較において、本学学生の仕送り金額は、全国の大学生の平均的な水準よりもやや多いといえる。

---

[1] 本分析の対象者数は 116 名である。
[2] 本分析の対象者数は 186 名である。

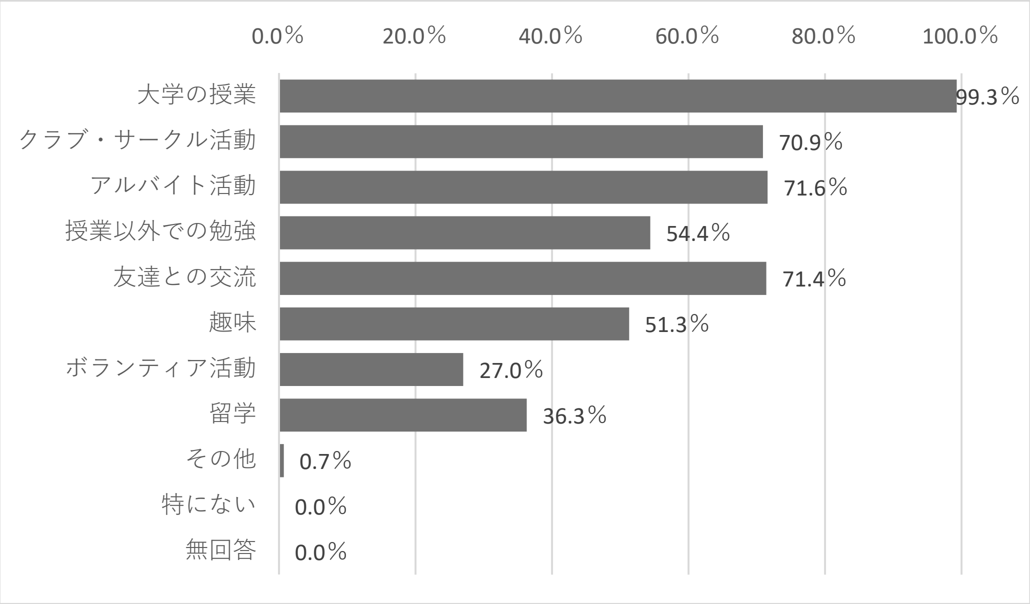


図表 4-4　1 か月あたりの仕送り予定額

⑤　大学に入学後、特にこの 1 年で頑張ろうと思う活動

図表 4-5 に、入学後、特にこの 1 年で頑張ろうと思う活動について、複数回答可として尋ねた結果を示す。「大学の授業」が 99.3%と例年通り最も高い。続いて、「クラブ・サークル活動」70.9%、「友達との交流」71.4%「アルバイト活動」が 71.6%であり、これらの傾向も過年度と同様である。

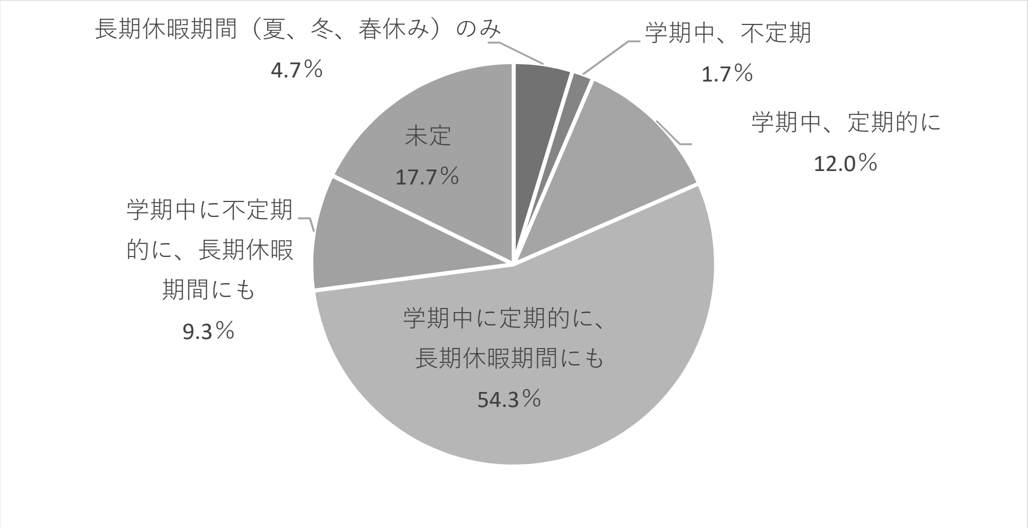
一方、平成 29 年度の調査から加えた「留学」は、平成 29 年度が 25.2%、平成 30 年度は 35.4%、平成 31 年度も 36.3%と上昇傾向にある。また、ボランティア活動も平成 30 年度に続いて約 3 割になった(お茶の水女子大学 2019)。



図表 4-5　大学に入学後、特にこの１年で頑張ろうと思う活動

⑥　アルバイト活動の予定

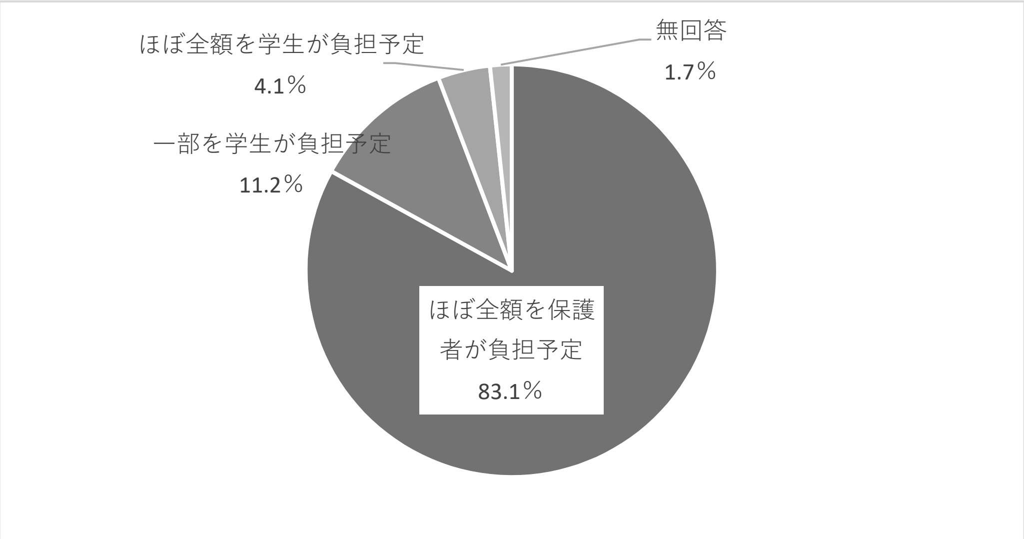
図表 4-6 は、入学後にアルバイト活動を予定している者に対して、具体的な活動時期や仕方を尋ねた結果である[3]。最も多いのは「学期中に定期的に、長期休暇期間にも」54.3%であり、「学期中に定期的に」12.0%と合わせると 66.5%になった。この傾向は平成 30 年度・平成 29 年度も同様であった。



図表 4-6　アルバイト活動をする予定の時期や頻度

⑦　授業料の負担予定

図表 4-7 は、授業料の負担予定について尋ねた結果である。「ほぼ全額を保護者が負担予定」が 83.1%と高く、平成 30 年度に比べて約 4 ポイント低下した(お茶の水女子大学 2019)。同時に、「ほぼ全額を学生が負担予定」の割合が 4.1%と、平成 30 年度・平成 29 年度に比べて微増していた。



図表 4-7　授業料の負担予定

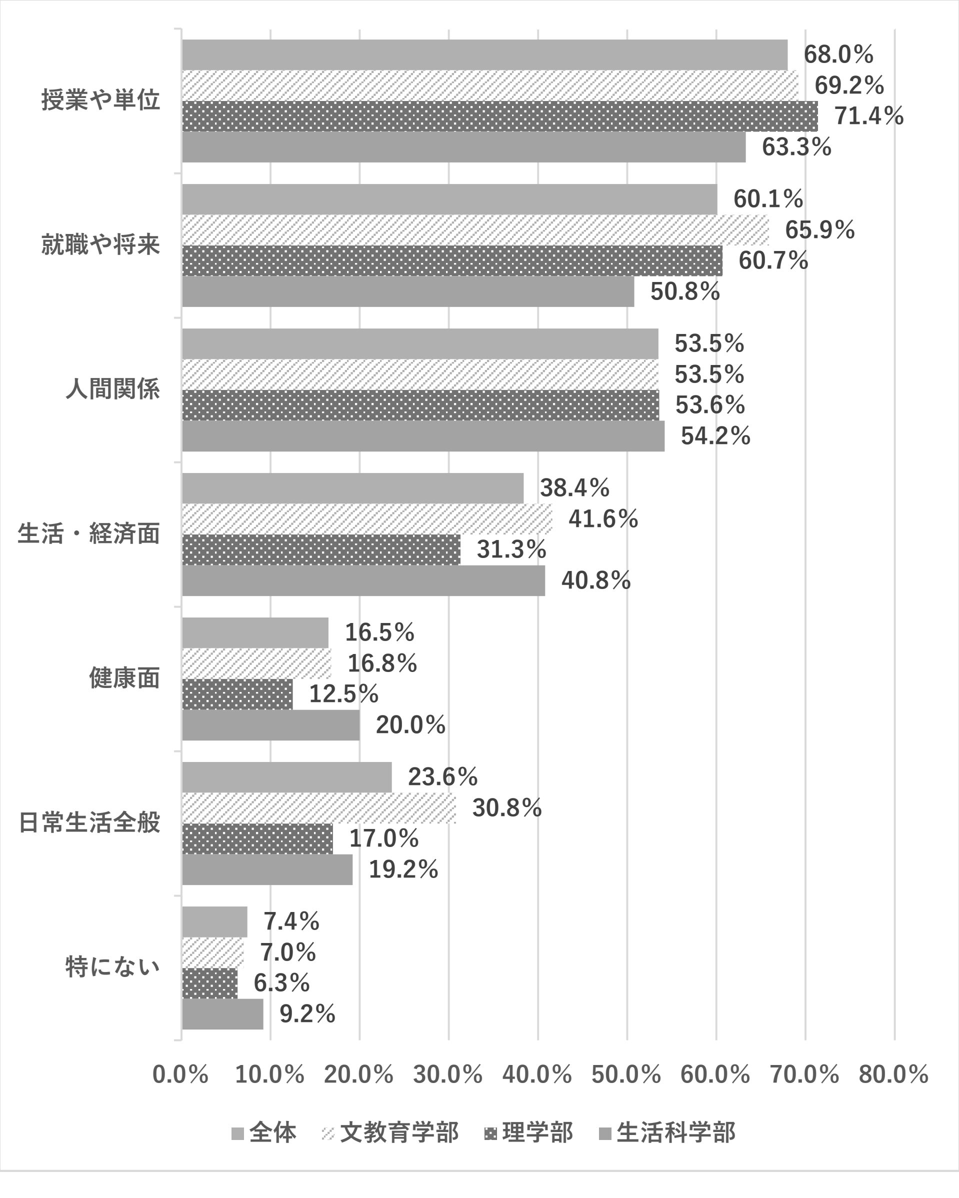
[3] 本分析の対象者数は 300 名である。

⑧　大学生活での不安・心配事

図表 4-8 は、全国大学生活協同組合連合会が実施している「保護者に聞く新入生調査」の調査項目を参考に、大学生活が始まって心配なことについて複数回答可として尋ねた結果である。

最も高い割合を示したのは「授業や単位」(68.0%)で、「就職や将来」(60.1%)、「人間関係」53.5%が続く。これら上位 3 項目の割合は平成 30 年度にくらべていずれも微増しており、逆に「特にない」の回答割合は 7.4%と昨年度にくらべて 4 ポイント低い。

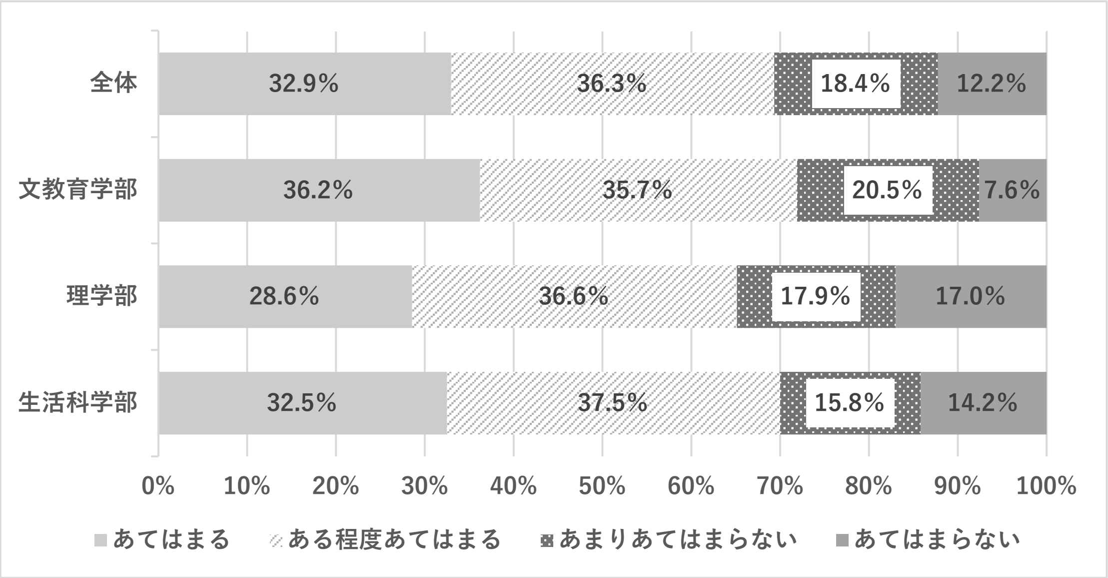
学部別では、「授業や単位」について理学部の割合がやや高く、文教育学部は「就職や将来」「生活・経済面」「日常生活全般」についての回答割合が他学部より高い。生活科学部では「健康面」の割合がやや高い傾向が見られた。



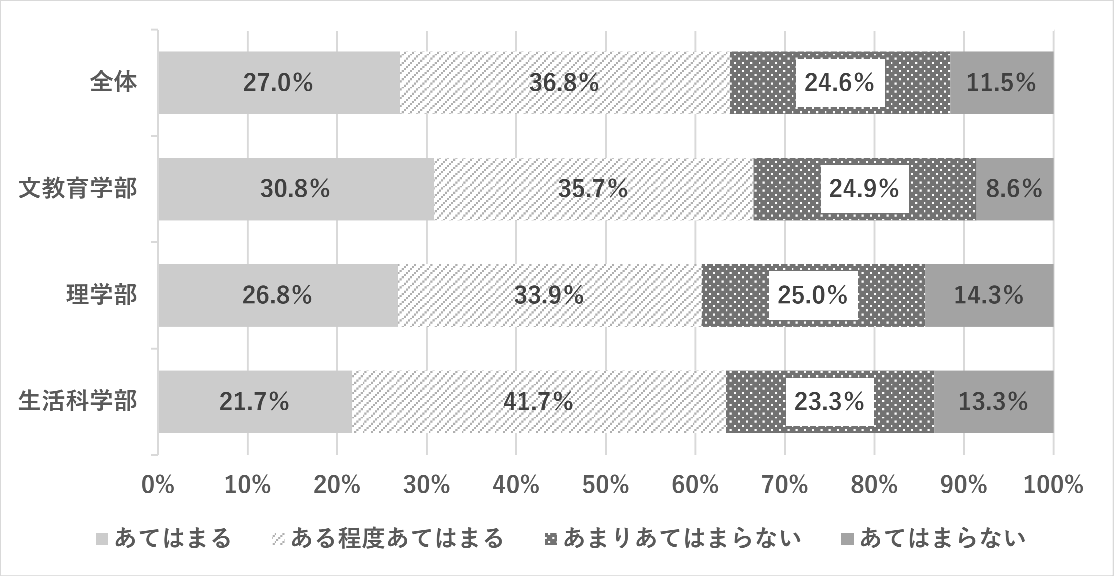
図表 4-8　大学生活が始まって心配なこと

さらに図表 4-9 から図表 4-15 に大学入学後の不安・心配事に対する今の気持ちについて 4 件法で尋ねた結果を示す。図 4-9「友達ができるか」について心配事として「あてはまる」「ある程度あてはまる」と回答した新入生は、全体の 7 割近くであった。同様に、「大学になじめるか」を不

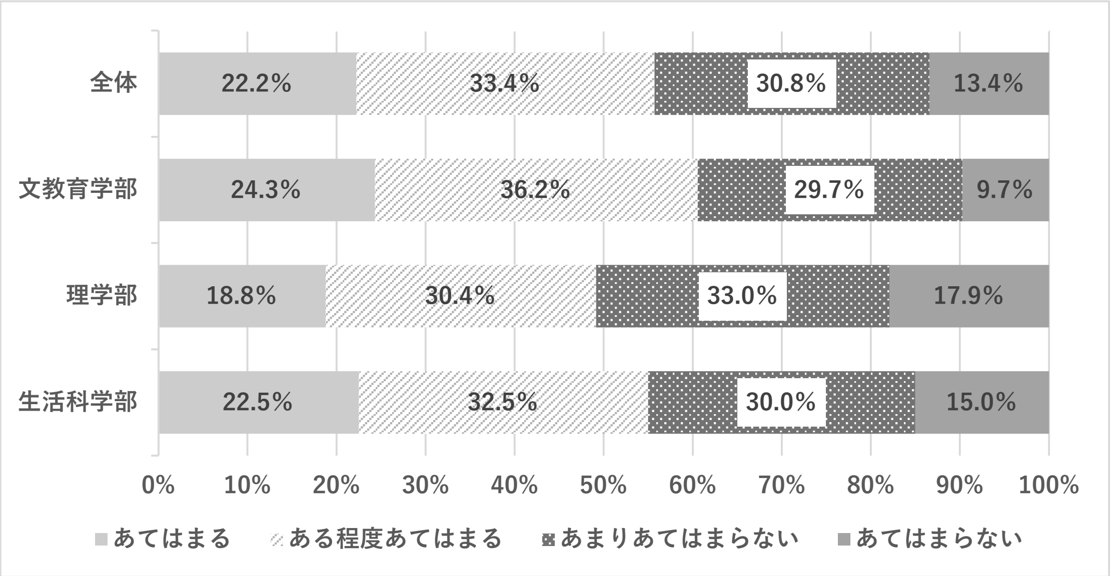
安に思う割合は、全体で 6 割超であり(図表 4-10)、昨年度と同じ傾向である。
図表 4-11「金銭面で負担がかからないか」は、全体で「あてはまる」22.2%、「ある程度あてはまる」33.4％で、この割合は理学部で低い傾向が見られた。この傾向も昨年度と同様である。
図表 4-12「授業についていけるか」については、「あてはまる」34.8%、「ある程度あてはまる」41.1％で合計 75.9%と、調査したすべての項目の中で昨年と同様に最も高かった。特に、文教育学部は「あてはまる」「ある程度あてはまる」の合計は 82.1%と高い。図表 4-13「進級や卒業ができるか」について「あてはまる」「あてはまらない」と回答した割合は 52.0%で、理学部が 58.1%と昨年度より高い様子が見られた。
図表 4-14「将来の目標がみつかるか」は、「あてはまる」「ある程度あてはまる」合計で約 6 割と、昨年度より上昇している。特に理学部は昨年度に比べて 16 ポイント高い。「卒業後ちゃんと就職できるか」は「あてはまる」31.7%、「ややあてはまる」40.8%と合計で 7 割を超え、これも昨年度よりやや高くなっていた。
いずれの項目についても、新入生の半数以上は各項目に不安を抱えており、特に、友達、授業、就職に対する不安がより大きい傾向が見て取れる。また、学部別には、文教育学部は金銭面、授業への不安を、理学部は進級や卒業、将来の目標面の不安を示す傾向が見られた。



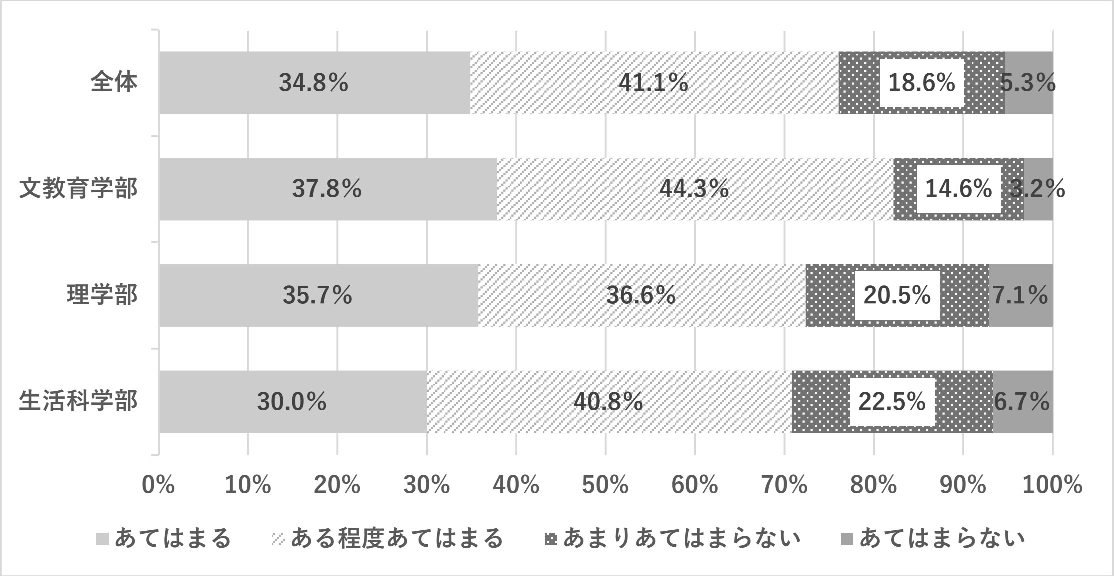
図表 4-9　友達ができるか



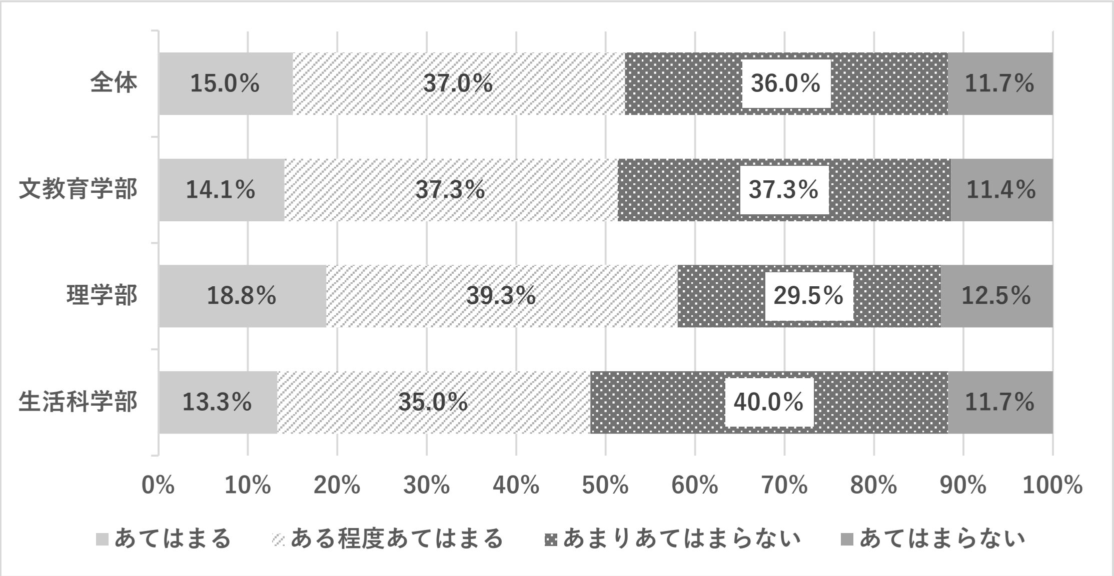
図表 4-10　大学になじめるか



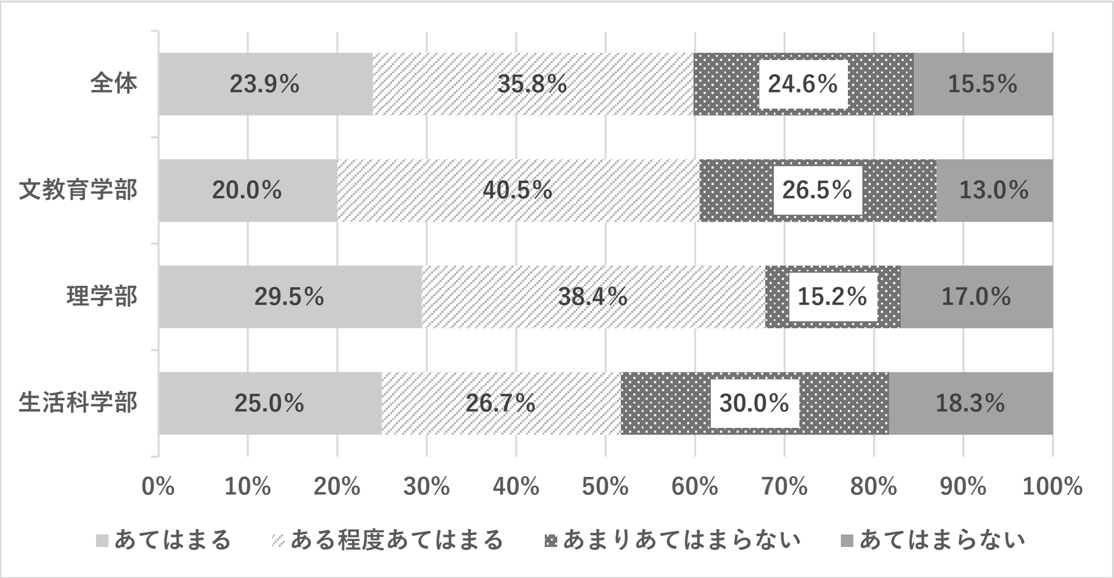
図表 4-11　金銭面で負担がかからないか



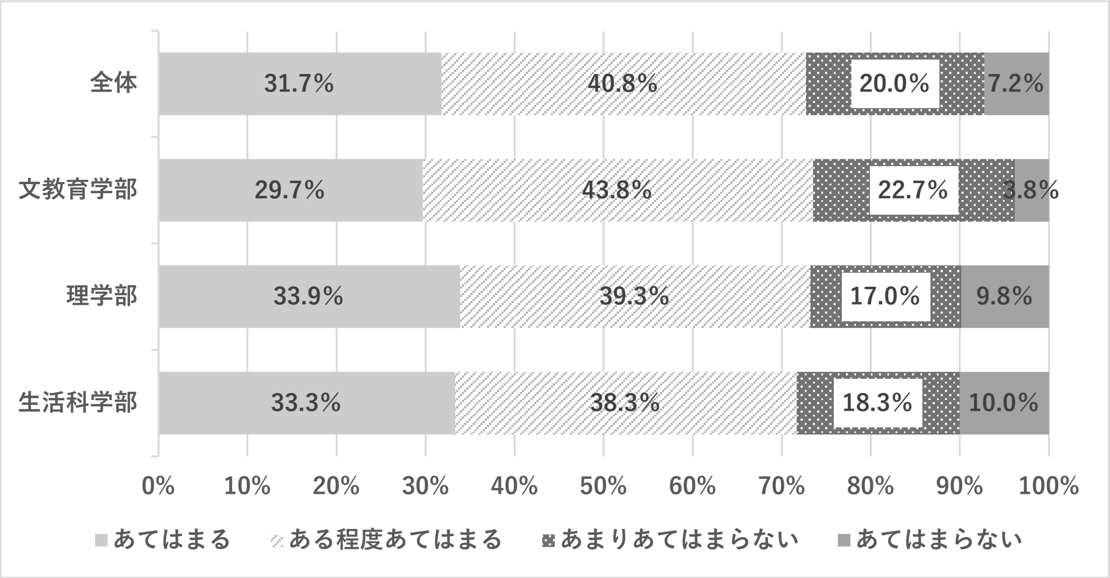
図表 4-12　授業についていけるか



図表 4-13　進級や卒業ができるか



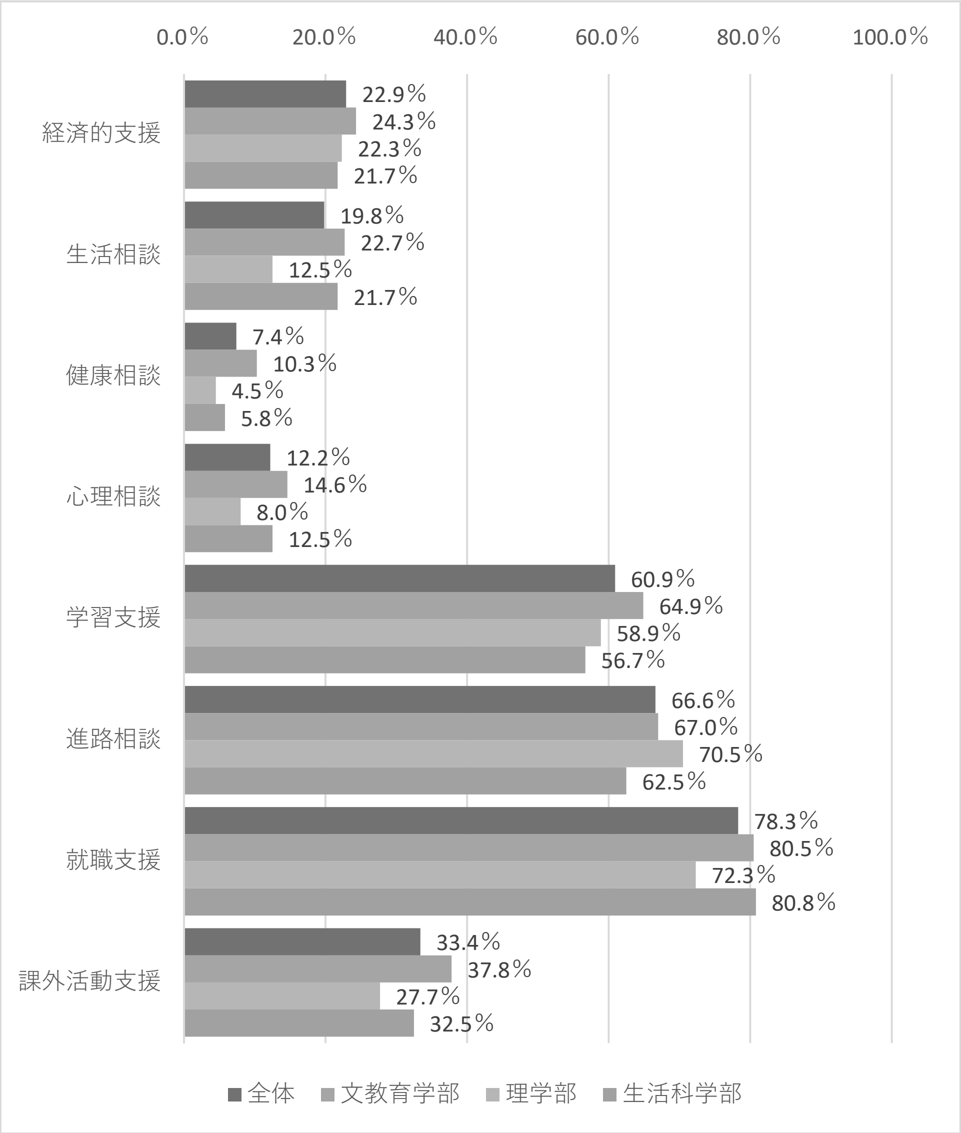
図表 4-14　将来の目標がみつかるか



図表 4-15　卒業後ちゃんと就職できるか

⑪　本学の学生支援活動への期待

図表 4-16 は、本学の学生支援活動に期待することについて、複数回答可として尋ねた結果である。全体では「就職支援」が 78.3%と最も高く、次いで「進路相談」66.6%、「学習支援」60.9%となっている。この傾向は平成 30 年度、平成 29 年度も同様である。学部別では、理学部が「進路相談」の割合が高く、文教育学部と生活科学部は「就職支援」が高い傾向も例年と同じ傾向であった。



図表 4-16　本学の学生支援活動への期待

（5）将来の進路

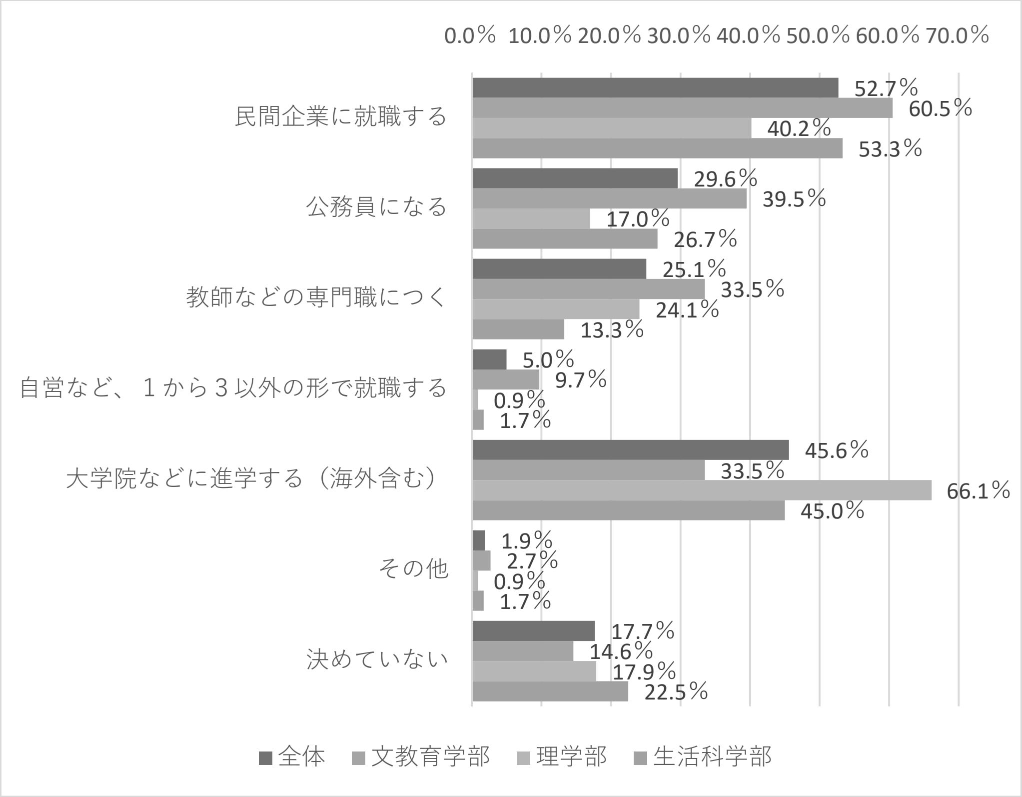
本節では、新入生の将来の進路について①大学卒業後の進路希望、②大学卒業後のキャリアについての考え、③就職や将来に関する親の関与について示す。

①　大学卒業後の進路希望

図表 5-1 は、大学卒業後の進路希望について、複数回答可として尋ねたものである。

全体でみると、「民間企業」が最も高く 52.7%、「大学院など（海外含む）」がそれに続いて 45.6%であった。学部別では、昨年度の生活科学部は「民間企業」70.2%と高かったが今年度は 53.3%と低下し、「決めていない」割合が 9 ポイント上昇した。「大学院など（海外含む）」は理学部が 66.1%と例年通り高い。

「公務員」を志望する新入生は全体の 29.6%で、文教育学部が 39.5%と特に高い。「教師など専門職」を志望する新入生は全体の 25.1%で、文教育学部が高い傾向が見られた。

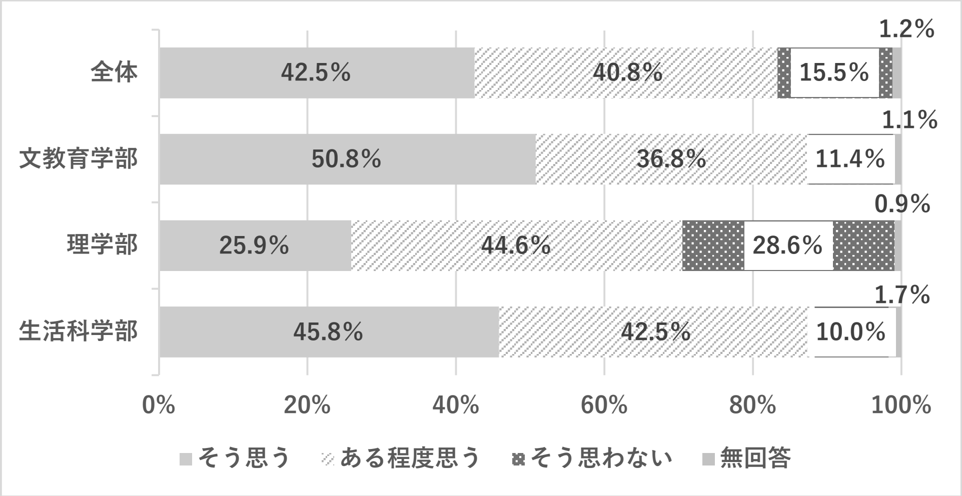


図表 5-1　大学卒業後の進路希望

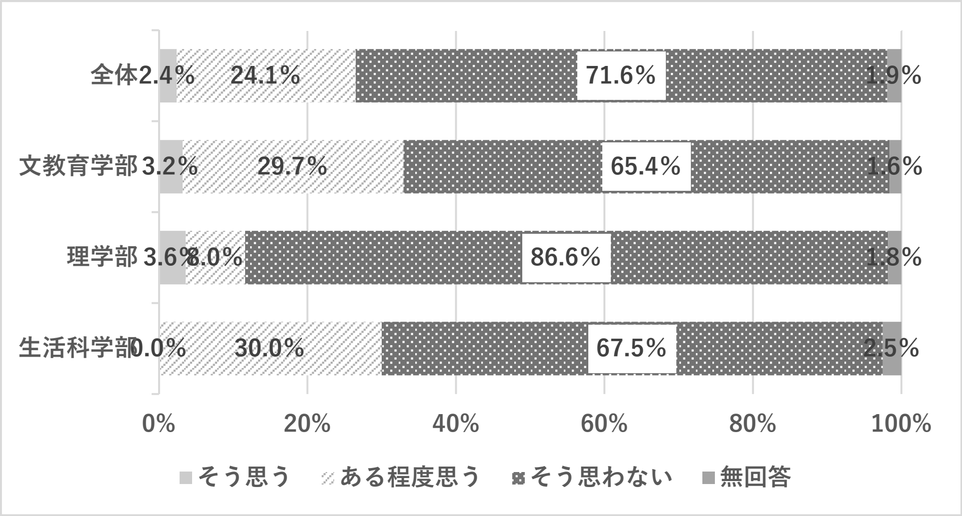
③　大学卒業後のキャリアについての考え

全国大学生調査コンソーシアム/東京大学 大学経営・政策研究センターが 2007 年に実施した「全国大学生調査」を参考に、「大学卒業後のキャリアについての考え」に関する 9 項目について 3 件法で尋ねた結果を図表 5-2 から図表 5-10 に示す。

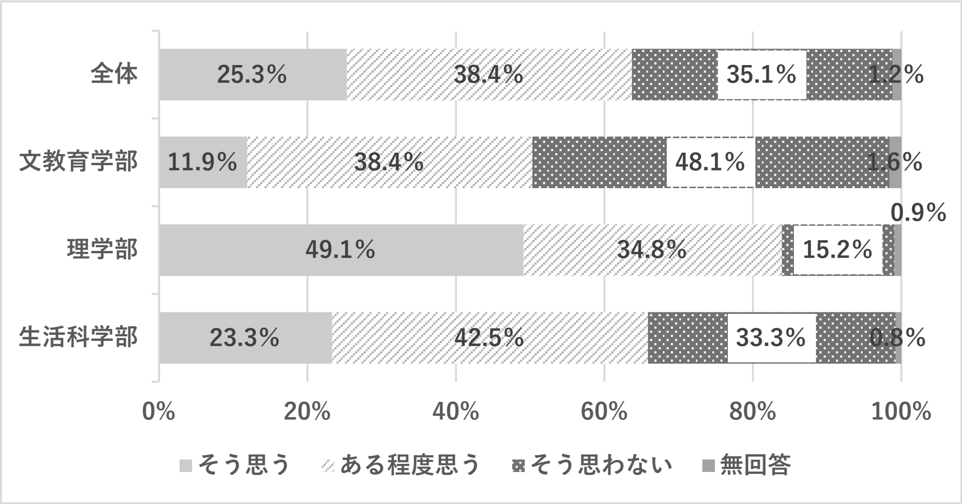
図表 5-2 から図表 5-7 は、「卒業後の進路」について尋ねた結果である。「すぐに就職して正社員・正規の職員になる」について、全体で「そう思う」「ある程度思う」と回答した人（該当率）は 83.3%で(図表 5-2)、「すぐに就職するが正社員・正規の職員にこだわらない」は 26.5%である(図表 5-3)。この結果は、これまでの新入生と同様の傾向であり、新入生が大学卒業後すぐに正規雇用を志向していることがうかがえる。



図表 5-2 すぐに就職して正社員・正規の職員になる



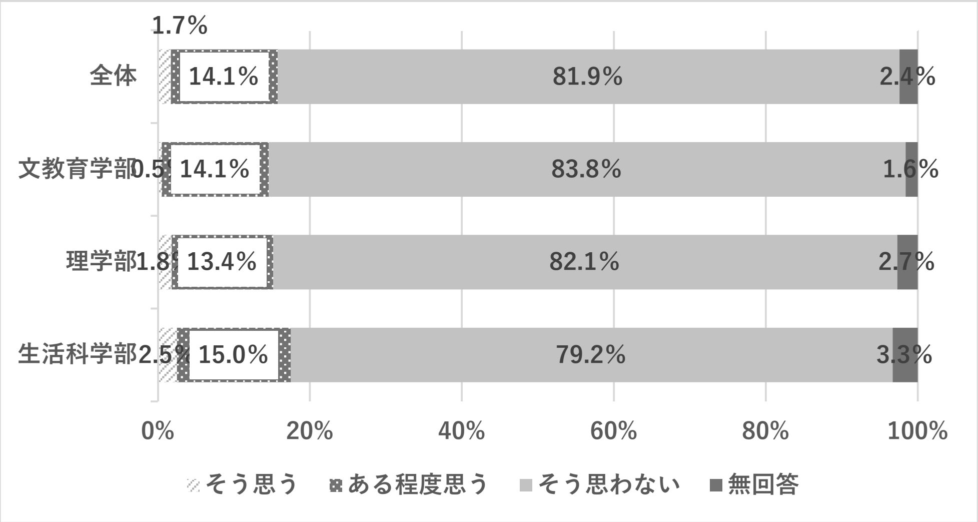
図表 5-3 すぐに就職するが正社員・正規の職員にこだわらない



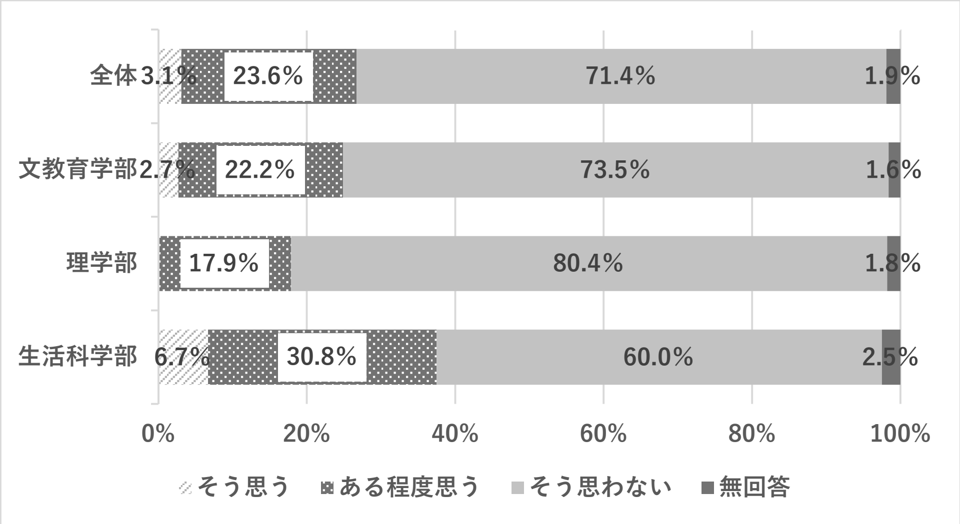
図表 5-4　すぐに大学院などに進学する

一方で、卒業直後の進学についても全体で 63.7%が検討しており、その割合は理学部で 83.9%と特に高く(図表 5-4)、例年と同様の傾向が見られる。一方、就職後の大学院進学は 2 割弱にとどまった(図表 5-5)。

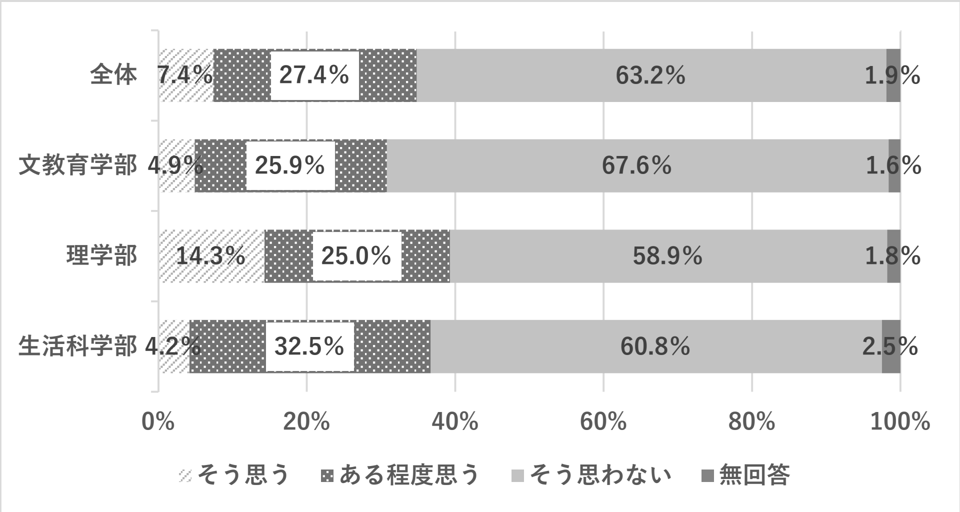
また、昨年と同様に「資格試験・公務員試験などに合格するまで就職しない」と考える新入生の割合は 2 割を超え(図表 5-6)、「卒業後すぐに就職をしなくてもよい」と考える人の割合も 3 割を超えた(図表 5-7)。「卒業後すぐには就職しなくてもよい」と考える割合は理学部で 39.3%と高かった。



図表 5-5　就職してから大学院への進学を考える

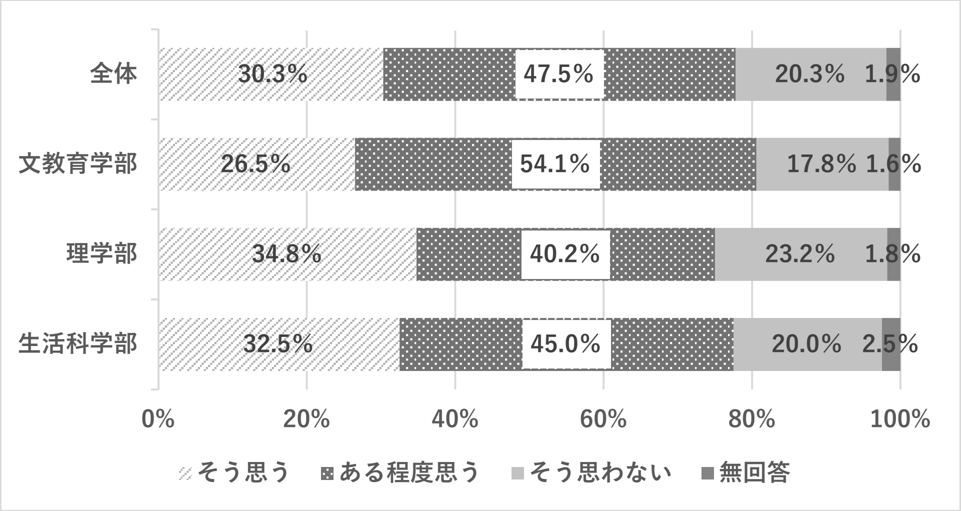


図表 5-6　資格試験・公務員試験などに合格するまで就職しない

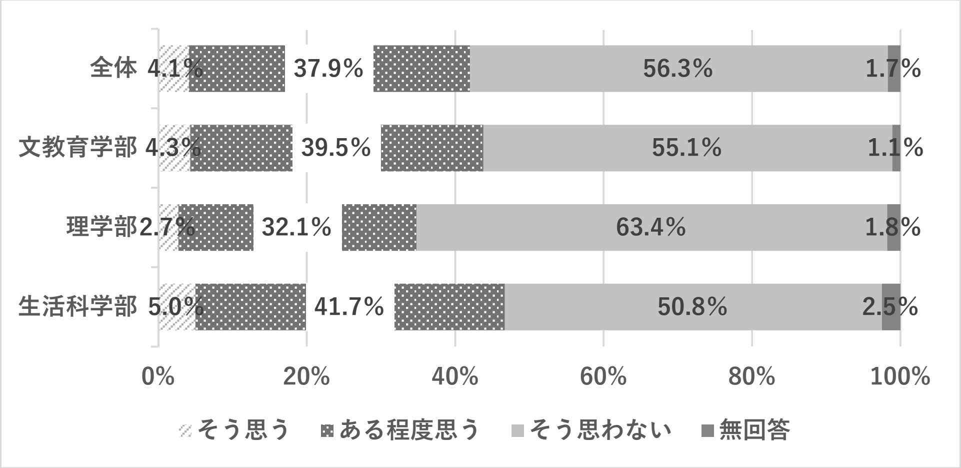


図表 5-7　卒業後すぐには就職しなくてもよい

図表 5-8 と図表 5-9 は、「就職後の勤務や退職」について尋ねた結果である。「最初の就職先にできるだけ長く勤める」と考える人は全体の 77.8%と初職の継続意識は高いが、平成 29 年度からは 8.5 ポイント、平成 30 年からは 1.5 ポイントと低下する傾向がみられる(お茶の水女子大学 2017; 2019)。その一方で、転職や独立の意識を持つ人は全体の約 4 割にのぼり、やや上昇する傾向にあった。

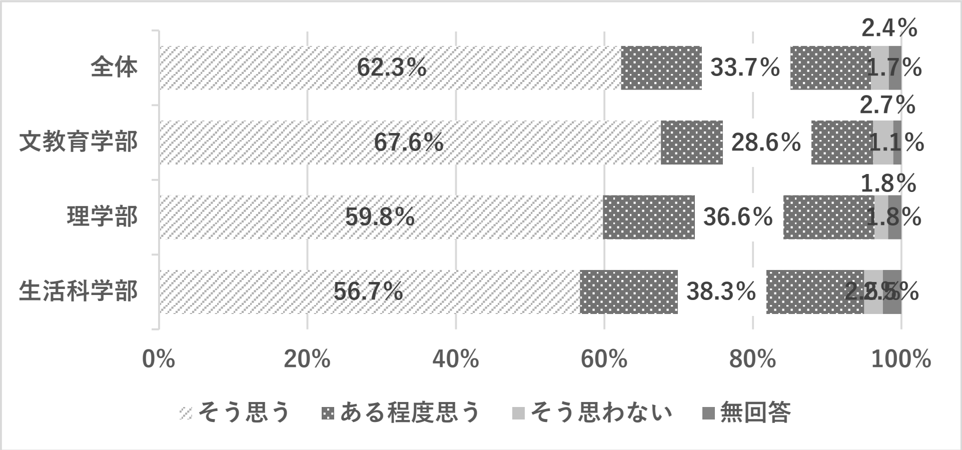


図表 5-8　最初の就職先にできる限り長く勤める



図表 5-9　何年かして転職や独立をする

図表 5-10「結婚・出産しても仕事を続ける」の該当率は全体で 94.0%と非常に高く、この傾向は継続している。

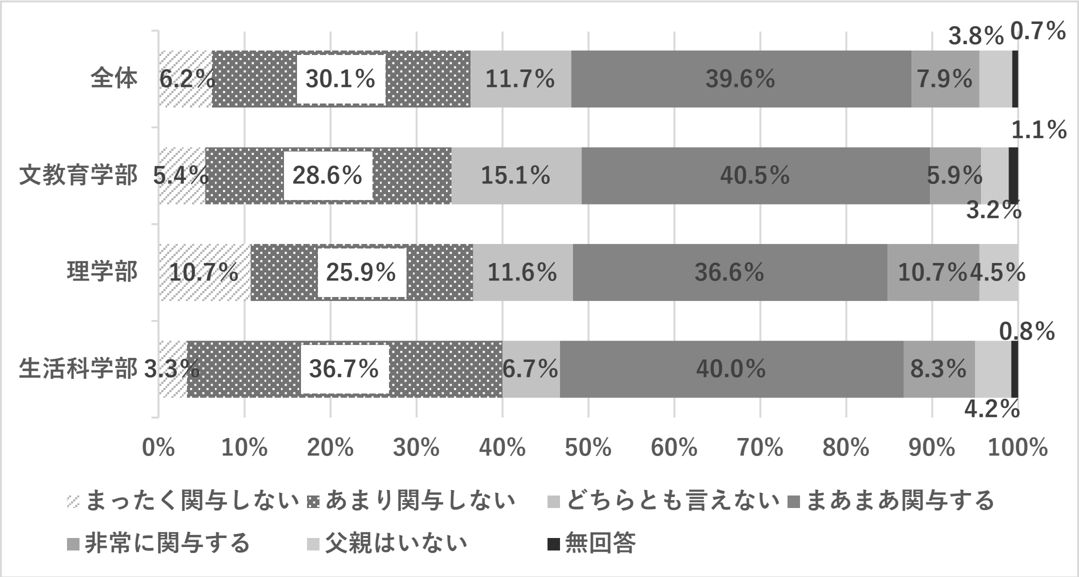


図表 5-10　結婚・出産後も仕事を続ける

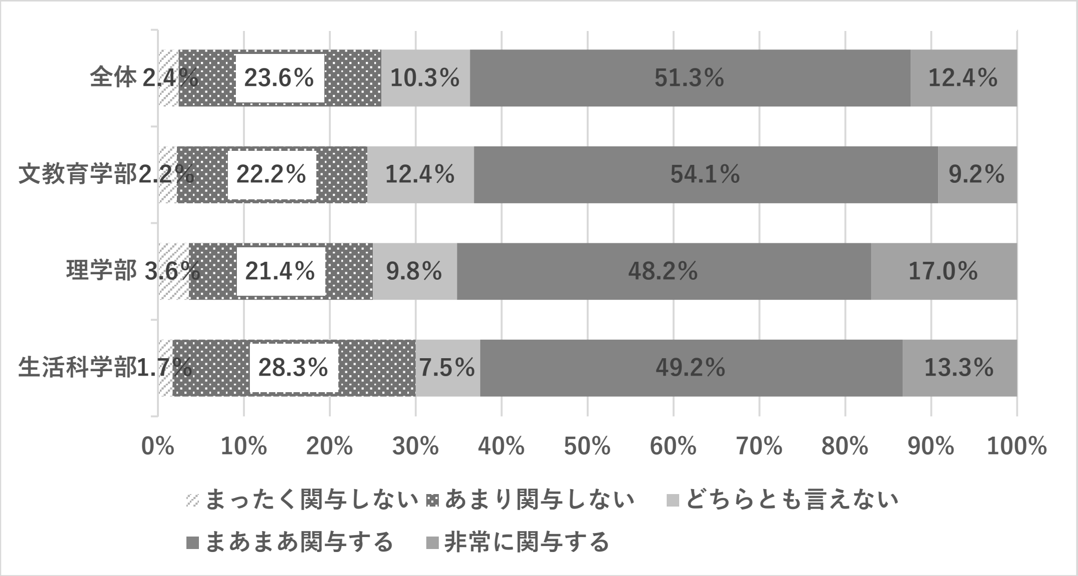
③　就職や将来に関する親の関与

就職や将来に関する親の関与について「あなたのご両親は、あなたの就職や将来のことに関して、どれくらい関与しますか。」として 5 件法で尋ねた。図表 5-11 に父親の関与についての結果を、図表 5-12 に母親の関与についての結果を示す。

はじめに父親の関与について、平成 31 年度新入生は、就職や将来のことに関して全体の 47.5%に父親の関与がある（「非常に関与する」＋「まあまあ関与する」）と回答している。同様に母親に関しては、全体の 63.7%に母親の関与があると回答した。この傾向は平成 29 年度から変わらない。学部別では、理学部は父親・母親ともに「非常に関与する」の割合が他学部より高めである。



図表 5-11　就職や将来のことに関する父親の関与



図表 5-12　就職や将来のことに関する母親の関与